Alle gegen Alle: サイバネティクス、力、ポストヒューマンのモノリス

Aldo Poblete Varas
2026年11月10日

万人の万人に対する闘い、ライン川のほとりで。投石機、帽子、砲火にさらされる大聖堂、水中を走る人々。半ば眠りについたサイバネティクス。その対話相手は、指令を操る者というより、見習いの司祭に似ている。哲学を学ぶ若い学生たちの教育的な明晰さと予備教育への本能が、このサイバネティクスを葬りつつある。彼らは求められたことを、そうすべきときに行い、正当化すべきことを正当化した。だが世界はそんなふうに動いたためしがない。世界が優先するのは最も強いもの、自らを押し通せるものだ。世代がみずからを生み出し、集団的な破滅に備えて自分たちの身体を整えるとき、彼らを導いてきたのは力だけだった。最後に勝つのは、時代が植えつけた際限のない恐怖にもかかわらず、火に身を委ねた者たちだ。トラクターは凄まじい速度で社会という野を横切り、法が許していた不規則な部分を粉々に吹き飛ばした。その不完全な秩序が持ちこたえるためには、教育を受けすぎた者たちが、腕もモラルも、何度となくねじ曲げられるに任せなければならなかった。

何もないように見えるところに何かを見て取れなければならない。つねに彼方があるかのように生きなければならない。イデオロギーとして用いられる偶然的唯物論が、われわれの最も苛烈な素朴さの一形態にすぎないと知りながら。存在しえないものから、森はソフトウェアとなり、われわれの戦後の平穏は電子の詩人が算出した誤りなのだと巡礼者を説き伏せる。東京がわれわれの建築的な苦悶の分点として現れるところで、今日のドイツは、歴史がなおあることを思い出させる。川岸の戦い。下へ、さらに下へ、地中で、部隊はいまも還元しえない鋼へとスローモーションで進む。この川のほとりの司祭の渇き、いまや純粋な対話、視覚の迷宮。終わりがないのに駆け去っていく日々。学生たちは老人に、言いたくないことを言わせる。ここで痛みは気まぐれから、神秘家のテクストは決定版の戦術教範から切り離される。安全装置は解除されている。哲学は世界を利用しなければならない。逆の操作は排出しなければならない。この対話は、単なる人間の域を越えて突き進む科学と何の関係があるのか。前へ進むために、どれほどの破壊を容認しなければならないのか。われわれはポストヒューマンについて語ろ

うとしてきた。まだ完全には非推奨とされていない美学が、われわれが跳躍を全うするのを妨げている。それでも、ほとんど機械であるわれわれは、もうその川を渡っている。

次の煉瓦を積むには、その前の一つが所定の場所に据えられていなければならない。その土台の上でわれわれが求めるのは、空の縁まで、そしてわれわれすべてを呑み込む貪欲な機械の中心まで通じる秘密の通路を保証する自由だ。科学と言葉そのものによって、われわれは、あらゆる病から新たな健康を、あらゆる虐殺から、意識の垂直性を受け入れることに基づく恒久平和を引き出そうとする全体性を築く。詩人の最高の達成は、言語との実りなきやり取りにもかかわらず、自分自身を救うことだ。書くことがずっと問題だった。われわれが見出した解決策は、手を止めずに書き続け、アーカイブに糧を与えることだった。そのあいだ、背後では巨大な白黒のモノリスがせり上がり、われわれのヒューマニズムの時代の終わりを告げた。われわれは進歩が切り刻まれていくさまの証人とならなければならなかった。われわれはその崩壊を手入れしなければならなかった。

共生体のための薬、腐敗した身体の解放、想像しうるあらゆる確信に満ちた未来から来た、シートベルトを締めるアンドロイド的な現実。新素材の領域における生と生の後、自動化された諸科学、激しい口論というかたちを取る戦争、帰結の世界の終わり。懐古に浸る者たちは言うだろう。生きるものがまだ死んでいたころは、何もかももっと単純で、もっとよかったと。われわれは十代の若者に向けられた超現実的なレトリックに呑まれるだろう。制御があまりにも絶対的になるため、混沌は極限に達する。すべてがあふれ出すように見えるときでさえ、混沌の境界は損なわれない。蘇った者たちは別の者たちだろう。彼らは彼らなりのやり方で厄介事を起こし、われわれは彼らに対処しなければならないだろう。幸福な時代になるだろう。ある面では忌まわしくもある時代に。

生は恣意的なもののうちに、ある方向を取り続けることのうちにある。幸い、物語は自動化され、自明なことを説明する苦痛からわれわれを解放する。物語は、生がいかにして無限の混沌から引き綱をもぎ取ったかを語るだろう。いまや生は自らの手でその綱を握り、自らの不確かな運命を操っている。知性は、現実なるものの限界を変え、思うままに生きるためだけに、その限界を地図に描くだろう。未来から古きものの内へ入り込む技術。宇宙に自由を。自らの自由に宿る危険を感じ取る意識。